

3 調査の概要

今回の調査範囲のうち居住域では、建物の柱穴や炉が多数発見されましたが、それ以外の遺構はほとんど見つかりません。居住を主な目的とした場所であったと考えられます。柱穴は、足の踏み場がないほど密集して発見されましたが、同じ場所に建物が繰り返し建てられたことを示しています。建物の構造を検討しながら調査を進めたところ、炉を中心に柱穴が円形または多角形にめぐる平地建物がこれまでに134棟発見されています。今後は、平地建物より古い段階に築かれた大型の掘立柱建物の調査を進めていきます。

調査対象範囲の北東隅の地下2.4mでは、廃棄域を検出しました。緩やかな斜面に堆積したIII b層の中から膨大な数の遺物が出土しています。縄文土器は後期前葉～中葉のものが混在しており、継続的にモノが捨てられたと見られます。最も多く出土した遺物は、煮炊きに使用された深鉢（当時の鍋）のかけらです。煮炊きが繰り返されるため、消耗の激しい深鉢が多量に捨てられたようです。また、地山に含まれる礫を多く含みますが、建物を建てたときなどに発生した排土もここに捨てられたことを示しています。なお、廃棄域が形成される地層の中で炉の可能性のある焼土が見つかり、整地して何らかの遺構が築かれた可能性があります。

遺物は、縄文時代後期前葉を中心に後期中葉までの土器・石器が多く出土しました。土器は深鉢が大半で、それ以外の形のものはごく少数です。石器は狩猟に使われた石鏃、漁労に使われた石錘、木の伐採や加工に使われた磨製石斧、木の実（クリ・トチ・クルミなど）の加工に使われた石皿・磨石など、生活に必要不可欠な道具が多数出土しました。

これらの状況は、同じ時期に築かれた奥三面遺跡群の様相と異なります。奥三面遺跡群では、流通を前提として磨製石斧が大量生産された大規模集落で、通常の生活に直結しない遺物も多数出土しています。上野遺跡とは20kmほどしか離れていませんが、遺物構成の違いは明らかで、集落の性格の違いが表れていると見られます。今後、相互の関係などについて、検討していく予定です。



今回の調査で出土した遺物

上野遺跡 現地説明会資料

令和5年9月30日（土）

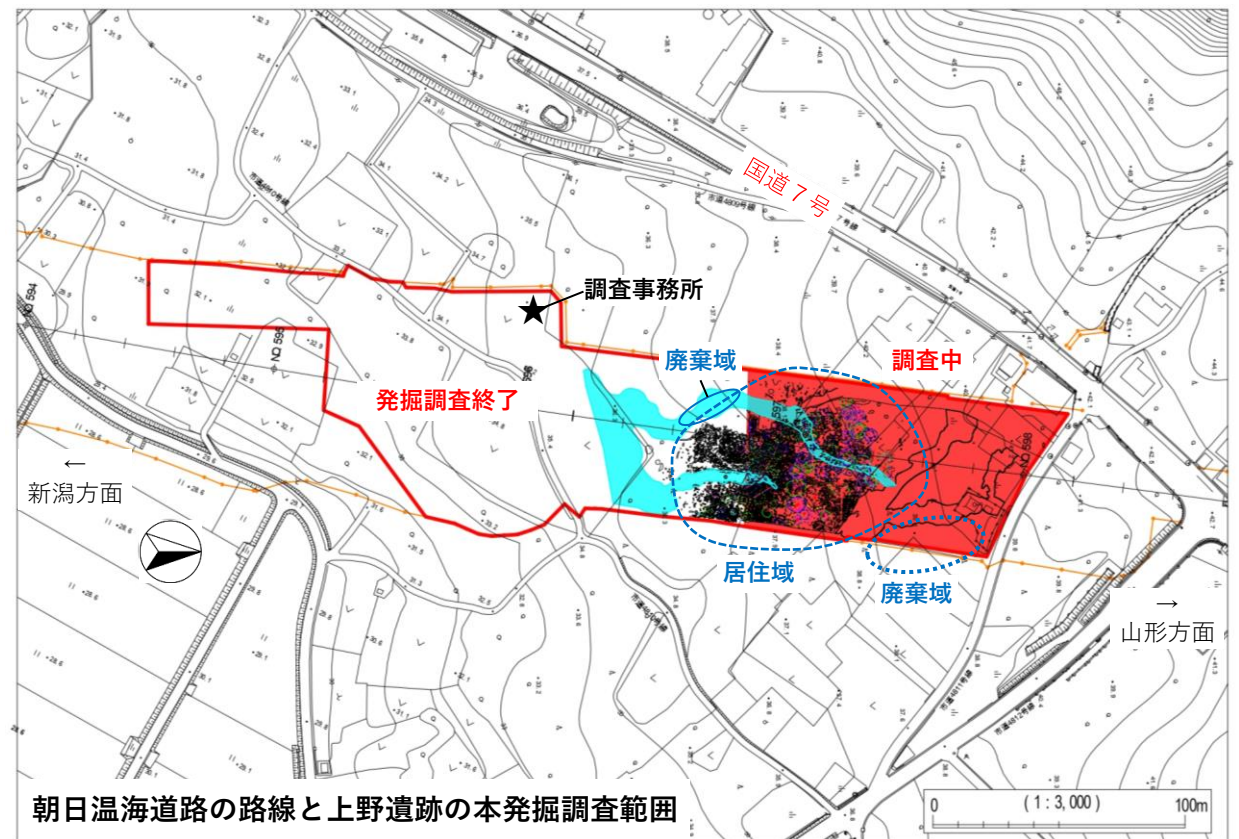
国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所
公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

1 遺跡の概要

日本海沿岸東北自動車道の一部になる国道7号朝日温海道路事業に伴う上野遺跡の発掘調査は、平成29（2017）年度から継続して実施しています。今年度は7回目の調査で、延面積で7,151 m²を対象に調査を行っています。

遺跡は高根川右岸の扇状地に立地します。扇状地は、西側の山地から土石流として流れ出た真砂土（風化した花崗岩）により形成されており、遺跡が築かれた前後の地層にも真砂土の堆積が見られます。真砂土の地層をはさみながら遺跡が重なって発見されたことが大きな特徴といえます。

これまでの調査で、延長約370mと広範囲に広がる縄文時代後期前葉（約4000年前）を中心とする大規模な集落跡であることが明らかになっています。7回の発掘調査で検出した遺構は10,000基以上、出土した遺物は4,200箱と、極めて多いことが特筆されます。現在は集落跡の中心部を調査しており、小高い範囲では建物が繰り返し建てられた居住域、調査対象地北東隅の緩斜面では遺物が多量に出土する廃棄域が見つかりました。今回の調査により、大規模集落の全体像が明らかになりつつあります。



朝日温海道路の路線と上野遺跡の本発掘調査範囲

2 基本土層

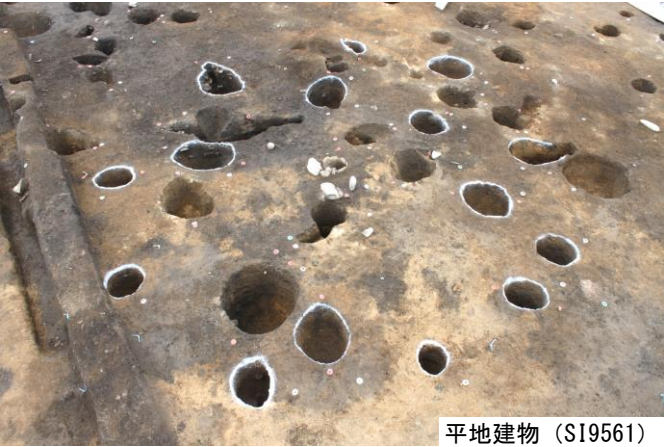
縄文時代後期の地層を、大きく4つに区分して調査しています。上からⅢa層、Ⅲb層、Ⅲc層、Ⅲd層に分けることができ、黒い土と黄色い土が交互に堆積しています。このうち上野遺跡で多数の遺構・遺物が発見されているのはⅢa層とⅢb層です。今回の現地説明会では、Ⅲa層とⅢb層の調査の様子を公開しています。



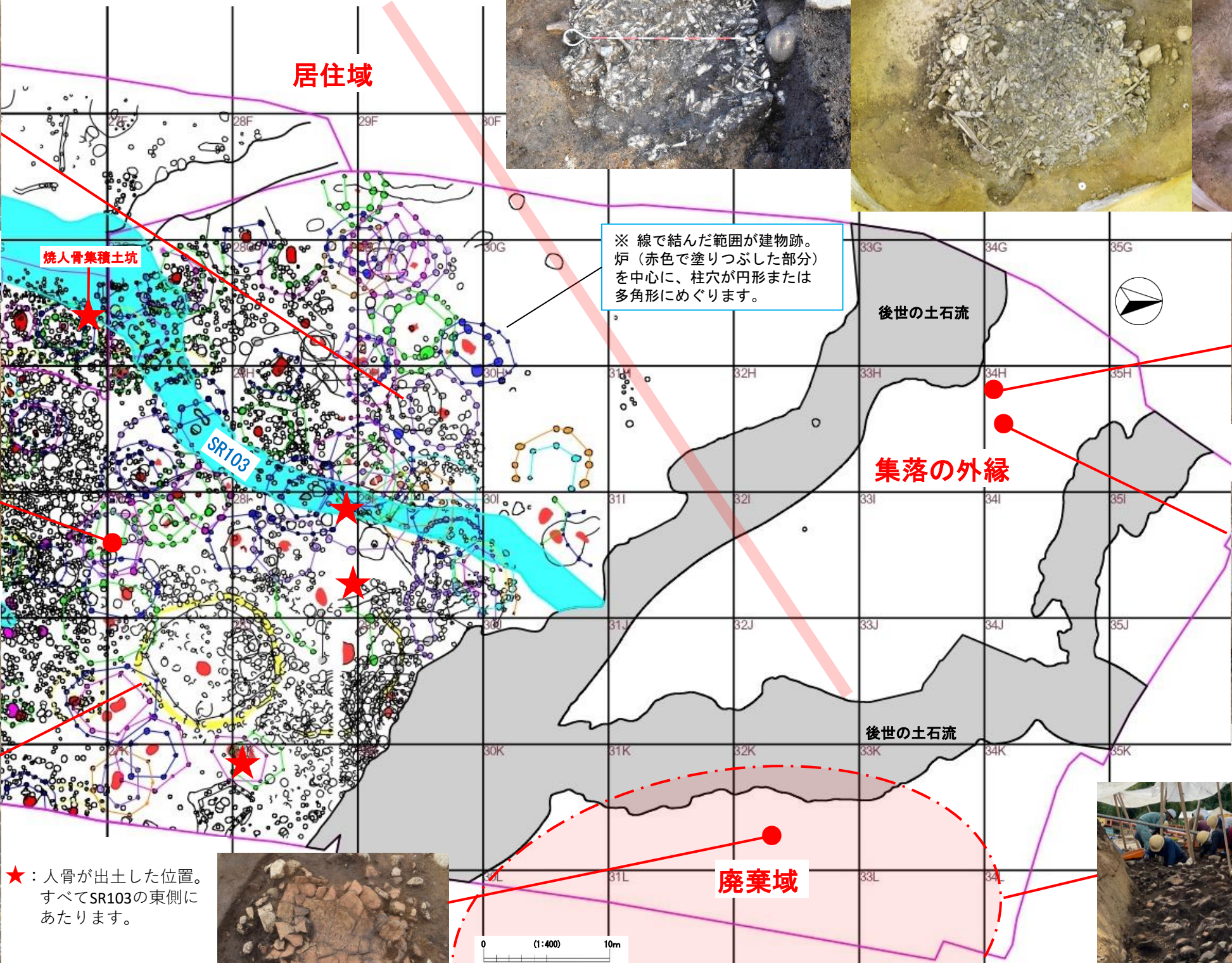
- Ⅱ層: 砂礫層
- ①Ⅲa層: 黄色系のシルト層
- ②Ⅲb層: 黒色系の砂礫層
- ③Ⅲc層: 黄色系の砂礫層
- ④Ⅲd層: 黒色系の砂礫層

焼人骨集積土坑 (SK439) の調査

流路跡SR103の東岸で発見した「焼人骨集積土坑」は、焼人骨を埋葬した遺構で、縄文時代の葬制を考えるうえで全国的に注目されています。現在、新潟医療福祉大学で調査を進めており、葬送の具体像が見えつつあります。土坑の上部 (写真①) では小さな骨がランダムに集積していましたが、下部 (写真②) では外周 (1辺50~60cmほど) を脚や腕の長い骨で囲い、内部に頭骨を置くような状態で埋葬されていました。さらに最下部 (写真③) では、腕・脚の長い骨を東西方向に並列させており、焼骨を規則的に配置しながら埋葬したことがうかがえます。なお、被葬者は少なくとも4体あり、高温で焼成されたと見られます。被葬者像や被葬者間の関係、焼成した場所と方法などを明らかにすることが今後の課題となります。なお、7次調査でも焼人骨が出土していますが、いずれも流路跡SR103の東側のみに限られます。SR103は、土地利用における重要な区画であったことが想定されます。



大型建物 (S111310) の検出状況
建物の外周を細く浅い溝が円形または多角形 (直径約10m) にめぐります。



深鉢がつぶれて出土した様子

7次調査周辺の遺構配置 (S = 1 : 400)



扁平な川原石5枚が重なった状態で出土しました。同じ状態は、ほかにも1か所確認されており、何らかの意図をもって残された遺構と考えられます。



集落の外縁から、小型の注口土器が完形の状態出土しました。扁平な川原石が重なって出土した位置と近く、居住域とは異なる生活空間であったと推測されます。



廃棄域の調査の様子